

気まぐれの人形師

小川未明

青空文庫

一

雪ゆきの降ふらない、暖あたかな南みなの方ほうの港町みなまちでありました。

ある日ひのこと、一人ひとりの娘むすめは、その町まちの中なかを、あちらこちらと歩ある

いていました。しばらく避寒ひかんに、こちらへやってきていたのです

けれど、あまり日数ひかずもたちましたので、お父さんとうにつれられて、

また北きたの方ほうの故郷こきようへ帰かえろうとしました。その前日ぜんじつのこと、娘むすめ

は、つぎには、いつくるかわからない、このなつかしい町まちの有あり

様さまをよく見ておこうと、こうして歩あるいていたのであります。

町まちの郊外こうがいには、丘おかの上うえに、圃はたけの中なかに、オレンジが、美うつくしく、

にしび かがや 西日に輝いていました。青黒い、厚みのある葉の間から、黄色い宝石 ほうせき で造られた珠 たま のように見られました。また、波の静かな みなとくち 港の口には、いくつも船 ふね が出たり入ったりしていました。遠くへいく汽船 きせん は、おっとりとうるんだ、黄昏 たそがれ 方の空に、黒い一筋 ひとすじ の煙 けむり を上げていました。そして、高い たか ぼしらの頂 いただき には、赤い旗 あか が、ちょうど真 ま っ赤 か な花 はな のように風 かぜ にゆらめいていました。
 娘 むすめ には、それらの景色 けしき は、歩いているときは目 め に入 はい らなかつたのです。けれど、たびたび見た景色 けしき でありまして、頭 あたま の中 なか に残 のこ っていましたから、いつでも思い出しさえすれば、ありありと目 め の中 なか に映 うつ ってきました。娘 むすめ は、北 きた の寒 さむ い国 くに に帰 かえ ってから おも 思い出 だ して、なつかしむにちがいありませんでした。

まちなかある
町の中を歩いてゐる娘は、むすめただこのとき、きてき汽笛の音をおとみみき
たばかりです。それは、みなと港に停まつてゐる汽船から吹いた笛の音
であります。かのじよ彼女は、この笛の音を聞くと、これから帰る故
郷の景色を目に描きました。そして、かんが考えました。

「まだ、わたしくに私の国は寒いだろう。しかし、はるじきに春になる。そうす
れば、はな花も咲くし、いろいろの鳥がやつてくる！」

おもこう思いますと、やはり、むね胸の中の血潮は躍つたのであります。
いろいろの鳥は、この町の空に、まちまた林の中に鳴いていました。
しかし、この小鳥も、いつかは、きたあの北の方の、かのじよ彼女の故郷
の方へ飛んでゆく日があるのだと思うと、むすめ娘は、これらの小鳥を
自分の家の裏にある林の中で、ふたたびふたたび見る日を楽しみとせず

はいられませんでした。

「私は、なにをお土産に買って帰ったらいいだろうか。」と、娘

は、この町で製造されるいろいろな品物や、また、お菓子の

ようなものを買集めました。そして、また、いつまでも自分が

記念にして、しまっておくようなものが、なにか見つからないも

のかと思つて、町の両側をながめながら歩いていました。

すると狭い道の上へ、片側の小さな店先から、紫色の色

光線がもれてきて、ある一とこだけ紫色に土の上を彩つ

ていました。娘は、その光線がどこからどういふふうにもれて

くるのであろうかと、思わず、店の方へ寄つていつて、色ガラス

で張られた窓の内部をのぞいてみました。

不思議にも、その小さな店は、人形屋でありました。奥のた
 なの上に、いくつも同じような人形が並べてありました。そ
 して、そのそばで、一人のおじいさんが、筆をとって、人形
 の顔を描いているのでありました。

おじいさんはランプの下で、人形の目や、鼻や、口を描い
 ていました。そこで、いちいち筆を動かしては、大きな眼鏡をか
 けた目で、じっと人形の顔をながめていました。自分の氣に
 いると、さもうれしそうに、それを丁寧に箱の中に納めました。
 そして、つぎの人形の顔を描きにかかったのです。もし、ど
 こか自分の氣にいらないうところがあると、おじいさんは、いつま
 でもいつまでも頭をかしげて、そのでき損なつた人形の顔を

ながめていましたが、しまいまえに前のよくできたときとは違ちがつて、
 手荒てあらに一方ぽうの箱はこの中なかに入れてしまいました。

娘むすめは、黙だまつて、それを見みていましたが、この人形にんぎようこそ自分じぶん
 は買かつて歸かえつて、長い間ながあいだの忘れがたい記念きねんにしようと思おもいました。
 そこで、彼女かのじよは店先みせさきの戸とを開あけて、中なかに入はいりました。

「お人形にんぎようを見みせてくださいな。」と、娘むすめはいいました。

脊せを円まるくして、人形にんぎようの顔かおを描かいていたおじいさんは、この
 とき筆ふでを下したに置おきました。そして立たつてきて、娘むすめの前まえへ、たなの上うへ
 上うへにあつた二つの箱はこを下おろして並ならべました。

「さあ、どちらになさいますか。」といつて、おじいさんは聞きき
 ました。

むすめ
 娘は、二つの箱はこの中から人形にんぎようを手てに取とって見みくらべたので
 あります。一つの箱はこには、「しあわせ人形にんぎよう」と書かいてありま
 した。そして、もう一つの箱はこには、なんとも書かいてありませんで
 した。

「こちらのほうは、すこし価ねが高たかうございます。こちらのほうは、
 すこし安やすうございます。」と、おじいさんはいつて、「しあわせ
 人形にんぎよう」と、書かいてある箱はこの中なかに入はいっている人形にんぎようは価ねが高たか
 いのだといいました。

むすめ
 娘は、そのどちらも手てに取り上あげて、よく見みましたけれども、
 すこしも顔かおや、形かたちに、ちがいはありませんでした。

「どこが、ちがっているのですか？」と、彼女かのじよは、おじいさん

にたずねました。

「この二つは、見たところでは、どこもちがいはありません。ただ、人形の顔を描いた時分の私の気持ちです。『しあわせ人形』と書いてある箱の中にはいつている人形は、その顔を描くときに、私の気持ち晴れ晴れとしていましたから、そう書いたのです。そして、もう一方の箱の中に入っている人形の顔を描いたときには、なんとなく私の気持ちるもの足らなさを覚えていたから、字の書いてない箱の中に納めたのです。」と、おじいさんは答えました。

娘は、みようなことをいうおじいさんも、あるものだと思いました。

「そんなら、こちらのなにも書いてない箱の中に入っているお人
 形んぎようさんは、不ふしあわせな人形んぎようなんですか。」と、彼女かのじよ
 は、おじいさんに問といました。

おじいさんは、大おおきな眼鏡めがねの底そこから、落おちくぼんだ目めを輝かがやかし
 て、じつと娘むすめの顔かおを見みながら、「それは、人にんげん間の身みの上うえも、人
 形んぎようの身みの上うえも同じことおなです。だれも行ゆく末すえのことを知しるもの
 がありません。ただ、私わたしが人形んぎようの顔かおを描かくときに、一方ほうは氣
 持もちよく、一方ほうは、なにか心こころの中なかにも足たらなさを感じかんじていたと
 いうまでです。」と、おじいさんは答こたえました。

娘むすめは、高たかいほうの人形んぎようと、安やすいほうの人形んぎようと、二つ買か
 いました。そして、その店みせから出でました。空そらの色いろは、水色みずいろが

つて、月がほんのりと夢のように浮かんで、港の町の屋根を照ら
 していたのです。

彼女は、二つの人形の幸福を祈りながら道を歩いて宿
 に帰りました。

二

翌日の晩には、もう、娘は、父といっしよに、汽車の中に腰
 をかけていました。そして、あの夢のように美しい港の町は、す
 でに遠く、あちらとなつてしまつたのです。二日めの夜は、故
 郷の家に帰つてみんなと話をしていました。まだ、北の国には、

雪が地の上に積もっていました。

その晩は、若い叔母さんも、遊びにきておられて、家の中は明るくにぎやかでありました。娘は、二つの人形を叔母さんに見せました。

「こちらが、しあわせの人形よ、こちらは不しあわせの人形なのよ。だって、叔母さんは、この二つが同じには見えないこと？」と、娘はたずねました。

叔母さんは、二つの人形を手に取り上げて、

「まあ、かわいらしいお人形だこと、ほんとうにいいお人形さんのね。二つ同じなんでしょう。どうして、一つはしあわせの人形で、一つは不しあわせなの？」と、叔母さんは頭

をかしげて聞きかれました。

「だって、人形屋にんぎょうやのおじいさんが、こちらは、しあわせで、こちらふは、しあわせだといったのですもの。」

「そう、私わたしが、着物きものを造つくつてきてあげましょうね。」と、叔母おばさんはいわれました。

二、三日にちたつと、叔母おばさんは、二つの人形にんぎょうに着物きものを造つくつて持つてこられました。一つのは、赤あかい色いろの勝かつたちりめんで、一つのは紫むらさきいろ色いろがかったメリンスで縫ぬわれていました。

「ちりめんがこれだけしかなかったの。だから、しあわせのお人に形ぎようさんんぎように着きせて、こちらのはメリンスにしておいたのよ。またこんど、いい布きれがあつたときに、しあわせのお人形にんぎようさん

に、着物きものを造つくつてあげましょうね。」と、叔母おばさんはいわれました。

二つ人形にんぎようを並ならべておくと、赤あかいちりめんの着物きものを着きたほうがお嬢じようさまに見みえて、紫むらさきのメリンスの着物きものを着きたほうがなく、腰元こしもとのように見みられたのでした。

また、しばらく日数ひかずがたつて、ある夜よるのことでありました。近き所じよの知しつた家うちの小母おばさんが、子供こどもを連つれて遊あそびにこられました。帰かえる時じぶん分に子供こどもは娘むすめの人形にんぎようをしつかりつかんでいて離はなしませんでした。

「これは、お姉ねえちゃんの大事だいじな人形にんぎようさんだから、坊ぼうが持もつてゆくのでないの。」と、小母おばさんが、いくらいつても、子供こどもは手て

から人形にんぎようを離はなしませんでした。

「いいの、小母さんおば、貸かしてあげますから、持もつていらつしやつていいの。」と、娘むすめはいいました。

「ほんとうに、すみませんね。あした、じきに持もつてきますから、どうか貸かしてくださいね。」と、小母さんおばはいわれました。子供こどもの持もつていたのは、不ふしあわせのほうの人形にんぎようでありました。子供こどもをおぶつて、小母さんおばは娘や、彼女かのじよのお母さんかあたちにあいさつをして、家うちから出でてゆきました。

外そとには、粉雪こなゆきがさらさらと降ふっていました。小母さんおばは、もう自分の家へ着つかれたらうと思おもわれる時分じぶんでした。不意ふいに戸口とぐちで、げたに着ついている雪ゆきをたたいたものがありました。だれかと思おもう

と、その小母さんおばがもどつてきました。

「まあ、途中とちゆうで、この子供こどもがお人形にんぎようさんを落としたのですよ。いくら探さがしても見当みあたらないので、ここまでもどつてきました。」といわれました。

「そんなら、私わたしが探さがしてきます。」と、娘むすめは立ち上あがりました。

娘のお母さんむすめ かあは、ちようちに火ひをつけてくださいました。そして、子供こどもの小母さんおばと娘むすめはいっしょに連つれだつて、人形にんぎようを探さがしに出でかけました。

「ほんとうに、すみませんね。」と、小母さんおばは、娘むすめにわびられました。

「いいえ、すぐに見みつかつてよ。」と、娘むすめは、笑わらいながらいって

下^{した}を向^むいて歩^{ある}いてゆきました。

すると、だれも人^{ひと}の通^{とお}らない、雪^{ゆき}道^{みち}の上^{うへ}に、不^ふしあわせの人^にに

形^{なり}は落^おちていました。そして、もうその顔^{かお}の上^{うへ}にも、体^{からだ}の上^{うへ}

にも粉^{こな}雪^{ゆき}のかかっているのが、ちようちんの光^{ひかり}に照^てらされて見^みられしました。

「ああ、ここにありました。」といつて、娘^{むすめ}は雪^{ゆき}のかかった人^{にんぎ}形^{よう}を拾^{ひろ}いあげた。そして、心^{こころ}の中^{なか}で、なんという不^ふしあわせの人^{にんぎ}形^{よう}だろうと思^{おも}いました。

そこで、小母^{おぼ}さん^{うち}に別^{わか}れて、彼女^{かのじよ}は、しつかりと人^{にんぎ}形^{よう}を抱^だきながら家^{うち}にもどつてきました。そればかりでなく、その年^{とし}の夏^{なつ}には、不^ふしあわせの人^{にんぎ}形^{よう}は、たんすの上^{うへ}から落^おちて、片手^{かたて}

を折おってしまいました。

「どうして、このお人形にんぎようさんばかり不ふしあわせなのでしょう？」と、彼女かのじよは怪あやしみました。

いつしか、月日つきひはたちました。いつか、南みなみの方ほうの港みなとの町まちにいつから三年ねんめになりました。冬ふゆが、またやってきましたときに、

「ちようど、子供こどもの学校がっこうも休やすみだから、あの町まちへいつてこよう

。」と、お父とうさんはいわれました。そして、いっしよにゆかれるというこを聞きいたときに、彼女かのじよは、どんなに喜よろこんだでありますよう。

「ああ、またおじいさんのところへいつて、人形にんぎようをかいませよう。」と、こよう彼女かのじよは思おもいました。そして、もうけつして、

ふしあわせの人形は買うまいと思いました。

みなみくに まち

南の国の町の有り様は、三年前とすこしも変わりはありません

みなと けしき

でした。港の景色にも、丘のながめにも変わりはありませんでし

おか はやしな

た。いろいろの小鳥は、林の中にないていましたし、オレンジの

実は、やはり黄色に熟していました。

むすめ

娘は、ある日、その町の中を歩いていました。いつかの人形

うや

屋にゆこうと思っていました。晩方の夢のようにかすんだ空

した

の下を、紫色の光のさす店を探しながら見覚えのある路次に

はい

入ってゆきました。

めいじん

「ああ、あの名人のおじいさんは亡くなりましたよ。気まぐれ

もの

者で、自分の造った人形にさえ、好ききらいをつけた人です

が……もうあの店みせはありません。いまでは、あの人ひとの造つくったものなら、どんな壊こわれた人にんぎよう形かたちでも大騒おおさわぎをして、旅たびの人ひとなどはあつ集あつめてゆきます。」と、町まちの人ひとは、娘むすめがおじいさんの店みせを問とうたときにいいました。

彼女かのじよは、はじめ、あの人にんぎよう形かたちが、そんなにいいのであるかということを知しりました。娘むすめはこのことをお父とうさんに告つげると、お父とうさんもおどろおどろいた顔かおをしました。そして、彼女かのじよは、自分じぶんの家うちに帰かえったとき、二つの人にんぎよう形かたちを同じ箱おなの中はこに入れて、大事だいじに飾かざることにいたしました。このときから、長い間ながあいだ不ふあわせであつた人にんぎよう形かたちは、もう一つのしあわせ人にんぎよう形かたちと同じようおなに、しあわせになつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「気《き》まぐれの人形師《にんぎょうし》」
となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

気まぐれの人形師

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>